

二値画像に対する並列形処理と逐次形処理

豊橋技術科学大学

山下雅史

本多波雄

北橋忠宏

名古屋大学工学部

稲垣康善

1. まのびま 画像を局所的な演算を用いて処理する場合, その処理方法には, 画像上の各点を同時に処理する並列形と, 画像上の各点とある定ま, 順序の順に処理する逐次形とがある. 従来から, 画像, 特に二値画像に対する種々の並列形あるいは逐次形処理アルゴリズムが提案されてきたが, 両者の間の関係に対する一般論はほとんど展開されていはい. そこで我々は, 二値画像に対する並列形処理と逐次形処理の関係と考察し, いくつかの結果を得たので報告する.

2. 諸定義と準備 [記法 1] i) 整数の集合を Z , 非負整数の集合を N , 自然数の集合を N^+ , $[n] = \{1, \dots, n\}$, $B = \{0, 1\}$, によ, て表わす.

ii) 領域 X から値域 Y への全域関数の集合を $[X \rightarrow Y]$, によ

て表わす。□

[定義1] 大きさ n の 二値画像 は関数 $X: [n]^2 \rightarrow B$ である。
 $X(i, j)$ を X_{ij} , $(X)_{ij}$ などと書く。 $\mathcal{B}_n = [[n]^2 \rightarrow B]$,
 $\mathcal{B} = \bigcup_n \mathcal{B}_n$. □

[定義2] 位数 m の 近傍形 は m 項組 $P = \langle p_1, \dots, p_m \rangle$ である。
 $n \in \mathbb{N}$, $p_i \in \mathbb{Z}^2$, $p_i \neq p_j$ ($i \neq j$), $p_i \neq (0, 0)$. 近傍位数 m の近傍形の集合を \mathcal{P}_m , $\mathcal{P} = \bigcup_m \mathcal{P}_m$ とする。□

[記法2] 零ベクトル $v \in 0$, 特 $p_0 = (0, 0)$ と表わす。□

[定義3] 近傍位数 m の 局所関数 の集合 \mathcal{F}_m を $\mathcal{F}_m = [B^{m+1} \rightarrow B]$ とする。
 $\mathcal{F} = \bigcup_m \mathcal{F}_m$. □

[定義4] 走査 とは関数 $S: \mathbb{N}^+ \rightarrow [\mathbb{N}^+ \rightarrow (\mathbb{N}^+)^2]$ である。
 $n \in \mathbb{N}$, $S(n): [n]^2 \rightarrow [n]^2$ は全単射である。□

[定義5] 走査 S が近傍 $P = \langle p_1, \dots, p_m \rangle$ に対して 正則 であるとは、次の条件を満すことである。

□ $\exists M (\subseteq [m]) \forall n (\in \mathbb{N}^+) \forall i (\in [n]^2) \forall j (\in [m]) [S(n)(i) + p_j \in [n]^2 \Rightarrow (j \in M \Leftrightarrow S(n)^{-1}(S(n)(i) + p_j) < i)]$ □

本稿では、走査は近傍 K に対して正則なものだけを考察の対象とする。近傍 P に対して正則な走査の集合を $\mathcal{S}(P)$ と表わす。

[記法3] 近傍 $P = \langle p_1, \dots, p_m \rangle$, $S \in \mathcal{S}(P)$ とする。

$\text{pre}(P, S) = \{ p_k \mid S(n)^{-1}(S(n)(i) + p_k) < i \}$,

$\text{post}(P, S) = \{p_k \mid S(n)^{-1}(S(n)(i) + p_k) > i\}$, とする. \square

[定義6] $f \in \mathcal{F}_m$, $P = \langle p_1, \dots, p_m \rangle \in \mathcal{P}_m$ かつ, τ 定義される画像の並列変換 $\text{Par}(f, P)$ は次のように定義される.

$\forall X \in \mathcal{B}_n$ に対して, $Y = \text{Par}(f, P)(X)$. \square かつ,

$Y_{ij} = f(X_{ij}, X_{i+\mu_1, j+\nu_1}, \dots, X_{i+\mu_m, j+\nu_m})$, $p_k = (\mu_k, \nu_k)$,

$\forall k (\in [m]) [(i+\mu_k, j+\nu_k) \notin [n]^2 \Rightarrow X_{i+\mu_k, j+\nu_k} = 0]$.

又, $\tau_{\text{Par}}^m = \{\text{Par}(f, P) \mid f \in \mathcal{F}_m, P \in \mathcal{P}_m\}$, $\tau_{\text{Par}} = \bigcup_m \tau_{\text{Par}}^m$, とする. \square

[定義7] $f \in \mathcal{F}_m$, $P = \langle p_1, \dots, p_m \rangle \in \mathcal{P}_m$, $S \in \mathcal{S}(P)$ かつ, τ 定義される画像の逐次変換 $\text{Seq}(f, P, S)$ は次のように定義される. $\forall X \in \mathcal{B}_n$ に対して, $Y = \text{Seq}(f, P, S)(X)$. \square かつ, Y は以下の手順を τ 定義される.

for $i := 1$ until n^2 do
 $X_{S(n)(i)} := f(X_{S(n)(i)}, X_{S(n)(i)+p_1}, \dots, X_{S(n)(i)+p_m});$
 $Y := X$;

\square かつ, $\forall k (\in [m]) [S(n)(i) + p_k \notin [n]^2 \Rightarrow X_{S(n)(i)+p_k} = 0]$, とある.

又, $\tau_{\text{Seq}}^m = \{\text{Seq}(f, P, S) \mid f \in \mathcal{F}_m, P \in \mathcal{P}_m, S \in \mathcal{S}(P)\}$, $\tau_{\text{Seq}} = \bigcup_m \tau_{\text{Seq}}^m$, とする. \square

$\text{Seq}(f, P, S)(X)$ は, X の各要素を走査 S に従って, 次々と更新してゆくことを τ 定義される. 今, X_{ij} を更新

する直前の $X \in \text{Seq}(f, P, S)_{(i,j)}(X)$ と表わす。

[性質] i) $\forall X_1, X_2 (\in B_n) [\text{Seq}(f, P, S)_{(i,j)}(X_1) = \text{Seq}(f, P, S)_{(i,j)}(X_2) \Rightarrow \text{Seq}(f, P, S)(X_1) = \text{Seq}(f, P, S)(X_2)]$.

ii) $\forall S_1, S_2 (\in \mathcal{S}(P)) [\text{pre}(P, S_1) = \text{pre}(P, S_2) \Rightarrow \text{Seq}(f, P, S_1) = \text{Seq}(f, P, S_2)]$. \square

性質 (ii) から、逐次変換を決定する上で重要な役割を演ずるのは、走直 S の形ではなく、 S によつて決定される $\text{pre}(P, S)$ であることか理解される。そこで、以下では、近傍 P とその部分集合 L とを与えたとすに、 $\text{pre}(P, S) = L$ とする $S \in \mathcal{S}(P)$ が存在するかに否かを決定する手続を与える。

[補題 1] $P = \langle p_1, \dots, p_m \rangle \in \mathcal{P}_m$, $L \subseteq P$ とする。 $\text{pre}(P, S) = L$ とする $S \in \mathcal{S}(P)$ が存在するかに否かは可解である。

(略証) $L = \{p_1, \dots, p_t\}$ とする。 x_i に関する 3 つの方程式

$$\sum_{i=1}^t p_i x_i = 0 \quad \text{--- (1)}$$

$$\sum_{i=t+1}^m p_i x_i = 0 \quad \text{--- (2)}$$

$$\sum_{i=1}^t p_i x_i = \sum_{i=t+1}^m p_i x_i \quad \text{--- (3)}, \quad \text{とすると、}$$

$\text{pre}(P, S) = L$ とする $S \in \mathcal{S}(P)$ が存在するにための必要十分条件は、方程式 (1) ~ (3) が自明でない非負整数解を持つに否かである。

必要性の証明は容易であるので、十分性にだけ証明する。

P と L が与えらるべくとす, $S(n)$ を以下のよう構成する.
 集合 $[n]^2$ 上に半順序 $<_{pre}$ と $<_{post}$ と $\forall j_1, j_2 \in [n]^2$ [$(j_1 <_{pre} j_2 \Leftrightarrow \exists (x_1, \dots, x_t) \in \mathbb{N}^t - \{0\}) [j_1 = j_2 + \sum_{i=1}^t p_i x_i]$]
 $\wedge (j_1 <_{post} j_2 \Leftrightarrow \exists (x_{t+1}, \dots, x_m) \in \mathbb{N}^{m-t} - \{0\}) [j_2 = j_1 + \sum_{i=t+1}^m p_i x_i]$] により定める. (1), (2) が非負整数解を持つならば, 半順序集合 $([n]^2, <_{pre})$, $([n]^2, <_{post})$ は矛盾なく定まる. 又, (3) が非負整数解を持つならば, $(j_1 <_{pre} j_2) \wedge (j_2 <_{post} j_1)$ とする j_1, j_2 は存在しない. そこで,
 $S(n)$ と, $\forall j_1, j_2 \in [n]^2$ [$(j_1 <_{pre} j_2) \vee (j_1 <_{post} j_2) \Rightarrow S(n)^{-1}(j_1) < S(n)^{-1}(j_2)$] を満足するよう構成できる.
 S が $pre(P, S) = L$ を満たすことは明らかである.

(1) ~ (3) が自明でない非負整数解を持つならば可解である. \square

3. 結果 [命題 1] i) $\mathcal{L}_{Seq}^0 = \mathcal{L}_{Par}^0$.

ii) $\forall m \in \mathbb{N}$ [$\mathcal{L}_{Seq}^1 \not\subseteq \mathcal{L}_{Par}^m$].

iii) $\forall m \in \mathbb{N}$ [$\mathcal{L}_{Par}^m \not\subseteq \mathcal{L}_{Par}^{m+1}$].

(略証) i), iii) は明らか, ii) により証明する. 次のよう
 $Seq(f, P, S) \in \mathcal{L}_{Seq}^1$ と考える. $f(x, y) = x \vee y$, $P = \langle (0, -1) \rangle$, $S: T \forall$ 式走査とする. このとき, $Seq(f, P, S) = Par(g, P')$ とする g, P' は存在しないことを示す.
 今, $Seq(f, P, S) = Par(g, P')$ と仮定する. 明らかに,

$g(0) = 0$ である. $P' = \langle p_1, \dots, p_m \rangle \in L$, $n = \max\{|p_i|\}$ とする. $X \in \mathcal{B}_{n+1}$

$$X_{ij} = \begin{cases} 1 & : i = j = 1 \\ 0 & : \text{otherwise} \end{cases} \quad \text{と定める. } \quad \square$$

$(\text{Seq}(f, P, S)(X))_{1, n+1} \neq (\text{Par}(g, P'))_{1, n+1}$. これは、矛盾である. \square

[命題 2] i) $\mathcal{L}_{\text{Par}}^1 \subseteq \mathcal{L}_{\text{Seq}}^1$.

ii) $\forall m (\in \mathbb{N}) [\mathcal{L}_{\text{Par}}^2 \subseteq \mathcal{L}_{\text{Seq}}^m]$.

iii) $\forall m (\in \mathbb{N}) [\mathcal{L}_{\text{Seq}}^m \subseteq \mathcal{L}_{\text{Seq}}^{m+1}]$.

(略証) i) 容易.

ii) 並列変換 $\text{Par}(f, P)$ を次のように与える. $f(x, y, z) = x \wedge y \wedge z \in \mathcal{F}_2$, $P = \langle (-1, 0), (1, 0) \rangle \in \mathcal{P}_2$. 二の
とて, $\text{Par}(f, P) = \text{Seq}(g, P', S)$ とする g, P', S は存在し
たらしめると示す. 今, $\text{Par}(f, P) = \text{Seq}(g, P', S)$ を仮定
する. $X_1, X_2 \in \mathcal{B}_{2n-1}$ と,

$$(X_1)_{ij} = \begin{cases} 1 & : (i, j) = (n, n), (n \pm 1, n) \\ 0 & : \text{otherwise} \end{cases},$$

$$(X_2)_{ij} = \begin{cases} 1 & : (i, j) = (n, n), (n+1, n) \\ 0 & : \text{otherwise} \end{cases}, \quad \text{と定める.}$$

$S(2n-1)$ は, (n, n) を走査した後 $(n \pm 1, n)$ を走
査しなければならぬ. 同様に, 今, $(n-1, n)$ は

(n, n) より先 \times 走査される \times 仮定すると, $\text{Seq}(g, P', S)_{(n,n)}(X_1) = \text{Seq}(g, P', S)_{(n,n)}(X_2)$. 従 \times , $\text{Seq}(g, P', S)(X_1) = \text{Seq}(g, P', S)(X_2)$. 二 \times は \times , $\text{Par}(f, P)(X_1) \neq \text{Par}(f, P)(X_2)$ に矛盾する. $(n+1, n)$ より先 \times 走査される場合も同様 \times 矛盾 \times 導かれる. 従 \times , $(n+1, n)$ は (n, n) を走査し \times 後 \times 走査される. P は P , 二の場合も, 上の議論の簡単 \times 変形 \times より, 矛盾 \times 導く \times こと \times できる.

iii) $f(x_0, \dots, x_m) = \bigwedge x_i \in \mathcal{F}_m, P = \langle p_1, \dots, p_m \rangle \in \mathcal{P}_m$ ($p_i = (1, i-1)$), $S: T \forall$ 式走査, とする. $\text{Seq}(f, P, S) \in \mathcal{T}_{\text{Seq}}^{m-1}$ と示す. 今, $f' \in \mathcal{F}_{m-1}, P' \in \mathcal{P}_{m-1}, S' \in \mathcal{S}(P')$ が存在して, $\text{Seq}(f, P, S) = \text{Seq}(f', P', S')$ とあると仮定する. 今, P' に含まれる \times 何 \times の \times 要素 \times を p_t とする.

$X_1, X_2 \in \mathcal{B}_m$ と

$$(X_1)_{ij} = \begin{cases} 1 & : (i, j) = (1, 1), (2, t) \quad (t \in [m]) \\ 0 & : \text{otherwise} \end{cases},$$

X_2 : X_1 の $(2, t)$ 要素を 0 に置換 \times た \times 画像, と定義する.

$\text{Seq}(f', P', S')_{(1,1)}(X_1)$ と $\text{Seq}(f', P', S')_{(1,1)}(X_2)$ を比較する. $\text{Seq}(f, P, S)$ の定義 \times より, $\text{Seq}(f', P', S')_{(1,1)}(X_1)$ と $\text{Seq}(f', P', S')_{(1,1)}(X_2)$ は $(2, t)$ 要素を除いて等しい. 又, $(1, 1)$ 要素に注目しているとき, $(2, t)$ 要素はその近傍

に入らばいい。従って, $(\text{Seq}(f', P', S')(X_1))_{11} = (\text{Seq}(f', P', S')(X_2))_{11}$. これは, $(\text{Seq}(f, P, S)(X_1))_{11} \neq (\text{Seq}(f, P, S)(X_2))_{11}$ に矛盾する. \square

次に, 並列変換と逐次変換の間の等価変換について考察する. 即ち, $f \in \mathcal{F}_m$ と $P \in \mathcal{P}_m$ を与えたとし, $\text{Par}(f, P) = \text{Seq}(g, P, S)$ を満たす g, S が存在するための条件を求めよ. P とその部分集合 L を与えたとし, 補題 1 より, $\text{pre}(P, S) = L$ とする S が存在するかどうかは可解である. P ので, 考察は S を固定して行なえば十分である.

[補題 2] $f \in \mathcal{F}_m, P \in \mathcal{P}_m, S \in \mathcal{S}(P)$ を与えたとし, $\text{Par}(f, P) = \text{Seq}(g, P, S)$ とする g が存在するかどうかは可解である.

(略証) $\text{Par}(f, P) = \text{Seq}(g, P, S)$ とする g が存在するための必要十分条件を与える. $\text{pre}(P, S) = \emptyset$ ならば容易. 従って, $\text{pre}(P, S) = \{p_1, \dots, p_t\} \neq \emptyset$ とする.

$\alpha = \{l \in \mathbb{Z}^2 \mid l = x + y, x \in \text{pre}(P, S), y \in P\} \cup \text{pre}(P, S), \beta = \text{post}(P, S) \cup \{0\}, \gamma = \alpha \cup \beta$, とする.

又, $I = \{(h, i, k, j) \in \mathbb{Z}^4 \mid h, i > 0, k, j < 0, h - k = i - j\}$ とする. $\xi \in I$ に対して, $w(\xi) \subseteq$

$w(h, i, k, j) = \{(\mu, \nu) \in \mathbb{Z}^2 \mid h > \mu > k, i > \nu > j\}$ とする. $W = \bigcup_{\xi \in I} w(\xi)$.

$\square (\ell \in [Y \rightarrow B])$, $\ell (\in \text{pre}(P, S) \cup \{0\})$ に対して,
 $\square(\ell) = (u_0, \dots, u_m)$ ($u_i = \square_{\ell + p_i}$) とする.

今, $w (\in W)$ と $A (\in [\beta \rightarrow B])$ を固定する. 二のとき,
 $\mathcal{C}(A, w) (\subseteq [Y \rightarrow B])$ と,

$\mathcal{C}(A, w) = \{c \mid (\ell \notin w \Rightarrow c_\ell = 0) \wedge (\ell \in \beta \Rightarrow c_\ell = A_\ell)\}$
 と定める. ($\mathcal{C}(A, w) = \emptyset$ かもしれない). 更け,

$\mathcal{R}_b(A, w) = \{(b_1, \dots, b_t) (\in B^t) \mid \exists c \in \mathcal{C}(A, w),$
 $f(c(0)) = b, \forall i (\in [t]) [f(c(p_i)) = 1 \wedge p_i \in w$
 $\Leftrightarrow b_i = 1]\}$ ($b \in B$),

$\mathcal{R}_b(A) = \bigcup_{w \in W} \mathcal{R}_b(A, w)$, と定める.

二のとき, f が存在するための必要十分条件は,

『 $\forall A (\in [\beta \rightarrow B]) [\mathcal{R}_0(A) \cap \mathcal{R}_1(A) = \emptyset]$ 』, — (4)

である.

(必要性) 命題 2 (ii) の証明で用いた手法を一般化して適用
 するこゝとから証明される.

(十分性) (4) を満たす f が以下のように構成される.

$\forall B = (b_0, \dots, b_m) (\in B^{m+1})$ に対して, $A (\in [\beta \rightarrow B])$
) と $A_{p_i} = b_i$ ($i = 0, t+1, t+2, \dots, m$) かつ, と定める.

二のとき, $g(B)$ の値は,

$g(B) = \begin{cases} 0 & : (b_1, \dots, b_t) \in \mathcal{R}_0(A) \\ 1 & : (b_1, \dots, b_t) \in \mathcal{R}_1(A), \text{ とする.} \end{cases}$

このとき, $\text{Par}(f, P) = \text{Seq}(g, P, S)$ であることは, $R_b(A)$ の定義より明らかである. \square

[命題3] $f \in \mathcal{F}_m, P \in \mathcal{P}_m$ と与えられたとき, $\text{Par}(f, P) = \text{Seq}(g, P, S)$ となる g, S が存在するかどうかは決定可能である. \square

4. あとがき 本稿では, 二値画像に対する並列処理および逐次処理による, τ 引起される並列変換と逐次変換の関係と一般的に考察し,

(i) 近傍位数による分類される, 種々の並列変換および逐次変換の族の間の包含関係,

(ii) 並列変換と等価な逐次変換が存在するための必要十分条件, τ と与えられた.

残された問題は, 逐次変換の等価性判定, 多値画像に対する本稿と同種の考察, などがあげられる.

最後に, 名古屋大学福村晃天教授, 豊橋技術科学大学鳥脇純一郎教授, 平田富天助手, 並びに名古屋大学オートマテングループ, パターン認識グループの皆様への御討論に感謝する.